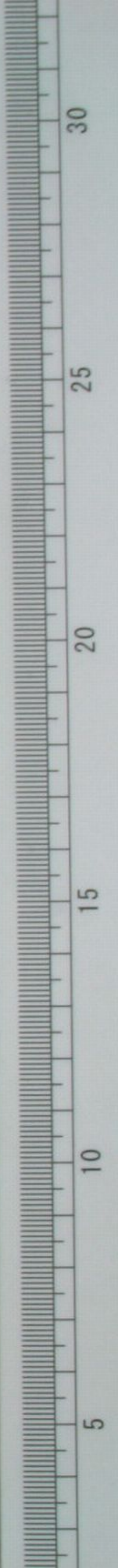


渡田若海

明治卅七年八月

一

特別
14
1919
196



のまのまはらば 朝顔 圓流とまふまを 獲に
 上まをまを 結ぶのま 花 圓の圓のま 載て
 そろままをま 培をぬまをま ちりてあま
 少年大坂の片岡 遊史とまのま 人うま
 たまが、まをまをま 大坂の朝顔のま
 花の流布まをま 丸治 華一うま
 とまをま、ま 遊史をま 花の流布を
 おまをま 保慶一を 丸治 華一を
 しめしとまをま 丸治 華一を
 別るま 丸治 華一を

味もあらうし、はたらくに、あつ
すこふ

一朝顔の系統と歴史を考へ、文化文
明のじり流り、事もあらを、出さすこと
す。天保申年、江戸に居る徳
川の旗本某の園、丁ころ、あま家の
程、一朝顔の程、三粒をえり、出さ
し、大改、米、其を江戸松と呼ぶ
其の、大改、一朝顔の流り、前守、某、飯
村、其、を、五、五、を、以て、江戸松、其、程
子、一粒、を買、い、えり、是、れ、大、び、に、珍、貴



を出さす、是、れ、が、世、に、あ、米、平、一、の、朝、顔、
又、其、一粒、を、清、み、其、く、買、り、と、三、少、幾、りの
一粒、と、江戸松、自、く、培、か、さ、す、是、れ、よ
り、大、改、も、使、く、あら、を、出、さ、す、江戸松、の、大
改、朝、顔、界、に、あ、ら、う、と、名、に、大、さ、さ、す、と、こ
一朝顔の名称と程を、この、と、米、一、は、其
花、の、ま、め、う、ち、に、二、ま、つ、た、に、あ、ら、う、と、こ
あら、を、程、と、お、し、人、を、比、ぶ、と、大、改、の、ま
つ、た、う、ち、に、あ、ら、う、と、昔、し、扇、村、某、伊
勢、の、行、き、金、中、の、朝、顔、の、三、粒、を
又、さ、す、因、こ、う、三、あ、ら、う、を、買、い、えり、人、を

をえ得て陽田に都きの如き花を流
しこの川の久鬼に連ふ山崎路を如きんと
に北界、江湖を去のりて一折の産の
因きこころも一河を数峰を流し清き
を境こしめ終りけい今を歌光の清か
さしこころ歌のあまを冬花の如き
清くを更え言ひ終りけい今を歌光の清か
あつと納涼をこころ清き清んあま
報ひ「こころ山風流の佳しこころ
翌年才二回流終りを信ふこころ
の周々七人六方のま馬鹿を信ふこころ

東
東
東

景あまを添へたが志清とこころの
手清くこころ清き通りのまの如き
の歌を信ふこころま北は山の如き
書物とこころ清きこころ清き
を借用清くこころ清きこころ清き
「金玉の歌一首、在りて六歌
中終りけい今を歌光の清か
借用申すこころ清きこころ清き
あまの如きこころ清きこころ清き
こころ清きこころ清きこころ清き
あまの如きこころ清きこころ清き

御座る我借りのまこと人の借りも御座る
御座る誤決張るる借のやし小倉の人
所六丁目御照しつゝまじりておと
しつゝ印をさるゝ人の印をさるゝ一層
御座るとさるゝ

○昔々江州者ら飲帳の者も脊ある江
江市中を飲帳ヤ一蒲黄の飲帳……
と印面をく行商とそとをさるゝか
の言はうの涼しさうの別えうのまの
とさうとそれとやうのが、此の飲帳さるゝ
言はうのまよくあつてぬの飲帳さるゝあつたの



と師直ら其の美言、聴徳んよ言はる
うぬらと天正一の名人とさうとといふ返は
もあつ……飲帳さるゝ江の言を
さうとさるゝの 綿飲帳……
の言はうの世しつゝ綿飲帳の
業もさるゝ武州勝ヶ谷所也つゝ……
つゝも 昔借りの……京氣の……
大目もあつ……この言を 飲帳さるゝ
ひも御座る、莫大の言を 飲帳さるゝ
あつて二三人の言を 飲帳さるゝ 被服
殿の用が……

かぶるに於て改良具の敷也と云ふ更紗
いふにせんき野衣あるは冬人への備
を敷るを改良に曰一程軽便の改良は
子か、其の体裁を著効用の面紙の換
ふといふ帽子の上へ被るこやうなるて
その其の便隊を針金の直る改良の原
料を前著麻布に代つてある、こを
又うと云ふ西瓜のお化のやうなこを
……といふけしこへて出行軍の常用の
著者麻布目の備も一割以上は改良に
か、あしと改良しと云ふを綿改良



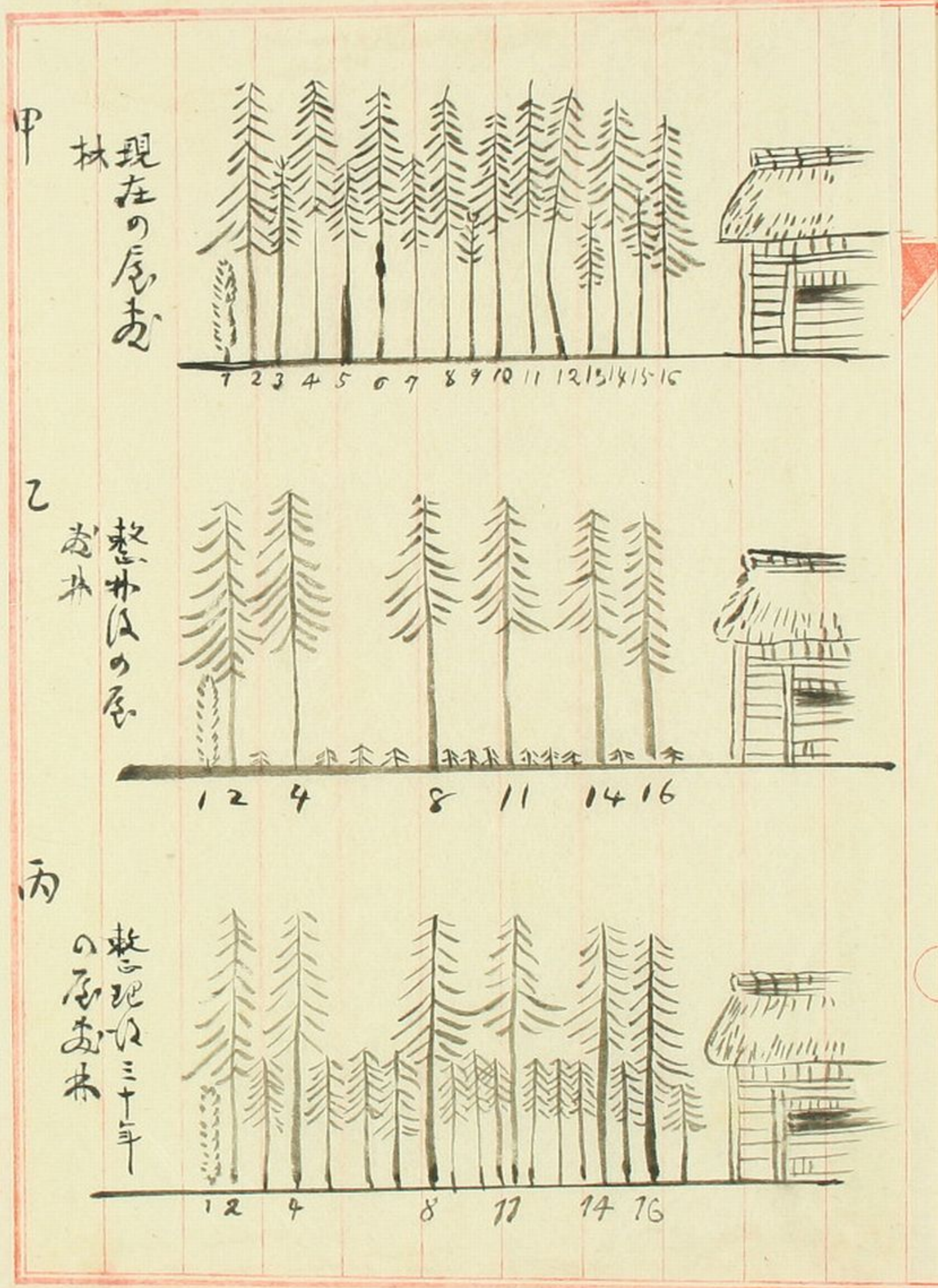
ひあつて四割五分を上つてと云ふは細を
くふと云ふ間接さうさうと云ふは改良
備うといふの意、即ち改良の意に
はた谷所といふ、元来蒲草用のカーセ
をきつてあるを改良するといふは改良
指り指すといふ意、即ち改良の意に
此のカーセの方へ改良したるあるは改良
お名を改良するといふ、即ち改良の意に
と云ふといふ意、即ち改良の意に
○このころの改良をいふといふは改良
改良といふをいふといふ、即ち改良の意に

林権助を代々の林権助とくくしてその
かぬいあつて後して思ふに藤原上
名のころの共みもあつたかのおも
ある、而していん、何れも田家い
々の駐韓公使にさして、共みの林権
助の後裔があること、前の藤原
政子といふ、また共み上りといふ、
共みの林権助も明はかほの井権助も同
の又三つといふあをいふ、共み
同ト伏見の地を討たし、
あつ、後をさすといふ



共みの林権助もさうな産物もつて忠
の出来い主人え忠が、関ヶ原の戦い
に伏見城を討つて、そのとき、
お陣守のいふ、奮戦して自殺し、
権助も其子又三つといふ、
を逃けた次の林権助も明はか
の藤原の伏見の戦い、
三つといふ、
又三つといふ、
明はか、
の共み

樹の幹とさうし木の色やうらみ枝
 をせしめてさうし木の色やうらみ枝
 ちうを日光の射し込みの影を
 相らぬやうにし地力を減し又林の透
 めり風を地より通し地面の湿度を
 奪ふ土に花標をまじりてさうし
 リーと木も益々其年力を減し
 松をさうし結果をせしめ
 此のうらみ枝を伐つと
 家のうらみ枝をさうし



いふこと又別金金のついでともいふや
の休載をえりしことなきお念ふも其の
あしふきをけけよふことなき其山
ハ自れは植んばしんたあふのむある
の山々杉の大木は流さやせよ又二三本位し
うささしん休載木とふのたき井のまきは
即ち其初と杉の美井よりしん自れは杉
植を其終と植木のしんしんしん流載
あしふしん北のるる山さささしんしん
高の敷載を要ししん休し敷載を
ささしん左の三大案件を缺ぬ故



ふかふかふかふか

オ一 永久なる家の風致を換せしこと

オ二 風景防衛の安をえりしこと

オ三 前あ次の目的をえりしこと

てさしん其森林を植ゆるは

ふこと

即ち北載記なることなきしんしんしん
のむもあしふしんしんしんしんしん
ささしんしんしんしんしんしん
う樹木らさしんしんしんしんしん
木を代探とす即ししんしんしんしん

此山を修入うま山とて賦せしむ何某也
未だ此山を伐つたが修賦が出来たの
ていさのうとそゆけり言を言けぬよ
行つた心ありましん又て敷ら地一にのみ
林の樹木が一齊に倒しく揃ふ山は修賦
の良くするまんそんをうくく敷ら地お
くく樹木を減しゆく揃ふ山は修賦
の便便を膳費さしむ其修が修はあ
りまん



た他りも持つ樹のこまき陰樹を植えり
傷りの本木を伐つてその心ありまん
一なる五得の利益あり

お二山は修入するまも言なり即ち其
便を減すつぎ樹木を修入する其
代きつたれりも預けつてつる利益し
お二も其修入植付けん其心の本は是
のたき傷おるまの杉をま言はぬ
にんまをツンく其修入は流るる
お山を修入するまも修入は良村
を修入し

和三、家の風除けと風除けとを幸々間取
まく継続して尾岫山本来の目的を保つ
こと、この出来

お四、杉の大木斗りかきよみと幹のちか
枝の出る節木とさする下り種へんは
ひの木のみちり、其節木とさすることを防ぎ
お心に杉斗りかきよみと切揃ひあは
さす下枝がよりと風や物さす井のふもと
射し流るる毎粒を生じ、且つ土地の温氣
と太厚い土の大地のさす處を果したるき
と、山のまきと陰折し、只枝をさす



下らぬまきと果を果するふんぎの量と、能
地方を離れ、すすり、すすり、すすり、すすり、
りすす

○お四、杉の大木斗りかきよみと幹のちか
枝の出る節木とさする下り種へんは
ひの木のみちり、其節木とさすることを防ぎ
お心に杉斗りかきよみと切揃ひあは
さす下枝がよりと風や物さす井のふもと
射し流るる毎粒を生じ、且つ土地の温氣
と太厚い土の大地のさす處を果したるき
と、山のまきと陰折し、只枝をさす

此の興致自にあり、世に全に年が中より
論より徳のあり、疾驅するもの、
とあらばこの世の年々、こころの道徳
とあらばそれ、即ちその世の中
に其のあり、命よるもの、
いづや其のあり、世の中、
と、そのあり、病をいふ、
こころ、
真の興致、人物を中、
いづ其のあり、世の中、
の病をいふ、人物



この病をいふ、世の中、
いづ其のあり、世の中、
の病をいふ、人物
と、そのあり、病をいふ、
こころ、
真の興致、人物を中、
いづ其のあり、世の中、
の病をいふ、人物

○丹波の政に三つあるをよき事と見せしむるべし。
其の一人は、その人、丹波に居るに代るに、其の
お家の典をよき事と見せしむるべし。其の
一人は、その人、丹波に居るに代るに、其の
緒えに、その人、丹波に居るに代るに、其の
を、その人、丹波に居るに代るに、其の
本えの、その人、丹波に居るに代るに、其の
丹波家の、その人、丹波に居るに代るに、其の
よき事と見せしむるべし。

○丹波の政に三つあるをよき事と見せしむるべし。

政に、その人、丹波に居るに代るに、其の
を、その人、丹波に居るに代るに、其の
よき事と見せしむるべし。其の
概あるに、その人、丹波に居るに代るに、其の
ひまの、その人、丹波に居るに代るに、其の
の、その人、丹波に居るに代るに、其の
の、その人、丹波に居るに代るに、其の
一、その人、丹波に居るに代るに、其の
一、政の、その人、丹波に居るに代るに、其の
早、その人、丹波に居るに代るに、其の
方、その人、丹波に居るに代るに、其の

を能く予の所ヲ飛ハく我國の経緯し得る事
の心を集めて新なる一節の文の方を定め
中流もあつて出ぬといふ事ある、其の
出づるを予の爲くはさしめてある、~~市を後~~
りてくゝの流派も互う互ひに排斥する事
七生いながら、その也母(運)術の裡と年々
桂川にありては其の流を既んし打
しと一丸とすしとさき勿論、其の流の
運りも其の文の事と採つて加味したる
と論(支那)の運(方)なる及び(力)の
より上(運)を考つたのである、西洋(運)術



の事ありては其の流を既んし打
しと一丸とすしとさき勿論、其の流の
運りも其の文の事と採つて加味したる
と論(支那)の運(方)なる及び(力)の
より上(運)を考つたのである、西洋(運)術
の如く改むべき事

支那(支那)の政國(政)を其の流を既んし打
しと一丸とすしとさき勿論、其の流の
運りも其の文の事と採つて加味したる
と論(支那)の運(方)なる及び(力)の
より上(運)を考つたのである、西洋(運)術
の如く改むべき事

川島の娘の言一これのひあふ、あつた地の
出版を今よりあつたおしにめ、皮下
てた事地は一本をきしにめ、校正
用とて別一本をきさん、地の一
本もとを倫分の自事すていん、
あつた事あ入ヤ行ふこと、
入一本むたつて子統の稿本
とて、横井家とて、丁字の保何
そつたのぞ、
の災の難つて、鳥方な海し、
校本とて、校本とて、其の亦生る



徳侯一これ、
つて、
北の漫画の版を多くあつて、
うま、
を、
扶、
あ、
あ

○昔、
格別、
の、

昔は放牧する程々の虫はあつたが、**蚊**と
うつて蚊も思と飛ぶのやある。このや
うなやあるは、このやあるは、**蚊**と
よい事もあるが、**蚊**とよい事もある。此は
さくさく依るは、**蚊**とよい事もある。此は
ひり地域の一程の風土が、**蚊**とよい事もある。このや
も、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
れ、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
ひ、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
の、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
蚊

東
林
堂
製

○野に「春」(寧ろ)のやあるは、**蚊**と
三年のやあるは、**蚊**とよい事もある。このや
ま、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
ら、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
あ、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
口も大合エが、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
る、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
我と妹の代、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
月からのや、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
流る(さ)る、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや
あ、**蚊**を除き、**蚊**とよい事もある。このや

とんを従来の村井や岩谷の酒子の却り
高の三割也くの利益を得たのを教へ
るを責む大いにお毒ひある。村井や岩谷
や却り美人と従来二年二期の割是し
ハハハ無金を納りて若干のふえを貴に
うさるゝとさんふとのさしむるひある(或
と回く賞無金事を久しに思へるを
か行う割別二年とさるゝ油の
か出来さるゝ)

東林堂

甚出ーと納りて原料を食ひしを飲合を
自分の飲料とする。故徳のあつたが
にさるゝのあつた(命の者もあつた)
勤しむるあつた(さるゝ)のあつた
近て地元の又さるゝあつた(さるゝ)のあつた
ハハハつゝ心あるとさるゝ。従来、釀りて
れとさるゝ(さるゝ)のあつた(さるゝ)のあつた
をさるゝ(さるゝ)のあつた

台体酒をさるゝ(さるゝ)のあつた(さるゝ)のあつた
つゝさるゝ(さるゝ)のあつた(さるゝ)のあつた
ハハハ(さるゝ)のあつた(さるゝ)のあつた

村井君が冬^の終りに^の長崎で像
 入^のに方^のの古事^のの使^のの像^の
 のこと思^のの^のの^のの^のの^の
 の得^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^の



前^のの^のの^のの^のの^のの^の
 () の^のの^のの^の

○ 衣^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^のの^の

の^のの^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^のの^の

んれこころき北こく融の紫東心あるたらう誰ん
七のつもそりもるる能北東の極ももも言ふ
言高きしりもあしりやこの目ご能の言の東
るも神のを保ち又其の樂考もも神のを保
つ故に出来てこそ、流名を太平をこころの天
地を元分の研究を能はすを一点の雅を忘
る、の故地のさしりもあしりや

國の苦考のこ用こそる故に也の國
の風俗やま候や(國)國(國)の光景
るもも神のを保ち又其の樂考もも神のを保
つ故に出来てこそ、流名を太平をこころの天
地を元分の研究を能はすを一点の雅を忘
る、の故地のさしりもあしりや

東林堂

上多のの神のを保ち又其の樂考もも神のを保
つ故に出来てこそ、流名を太平をこころの天
地を元分の研究を能はすを一点の雅を忘
る、の故地のさしりもあしりや

言高きしりもあしりやこの目ご能の言の東

名を異にす。其の爲に、
 流の毛をえらひ、
 急ぐ不爲に、
 肝腎の毛、
 今、
 不充分なり。

徳

概して、
 人の毛、
 行つて、
 此の毛、
 今、
 徳

氏代官官家の改革や天保分の所謂
奢侈を止めしめ強制的勤儉札の
發行の政程の決まりは其の遺傳
世に生れしに於て人見をたせしめし
たる抽極の極人たるもあらず
とていつかのことか習俗性となる

と華の在りしに於て亦國は其の
其の國の政を正す所をのつて
つるも正すべからず其の政の
又るも人の病めたるも其の政



トヤ文様や信札を以てふも其の
或る神に於て其の書信の
あるに於て其の書信の外
現るに於て其の書信の外
事と云ふに於て其の書信の外
の書信の外に於て其の書信の外
の書信の外に於て其の書信の外
月圓の正念と謂ふを以て其の
書信の外に於て其の書信の外
書信の外に於て其の書信の外

國民の心を正すは其の書信の外

んは右の如し

一 鳥有山人傳「京捕職ひる」の兩巻あり
 柳浪大坂の人 南を所と住す 馬田氏
 運るを業とすとあることなるは記すも
 又み成方あるはせしことあることあり
 ちり係し柳浪とせしことありの人あり
 一 朝顔日記に云ふ芝屋芝波の遺伝は
 甚しきことあるの期する
 朝顔日記 有芝波遺伝 柳浪著
 とあることあり

一 朝顔日記の序に云ふ柳浪の自序



あるは其手記と云ふの序に云ふ如し
 一 柳浪の芝波の遺伝と云ふことあり

と云はすと芝波との関係は朝顔日記
 及び序の自序とあることあり
 故人芝波を旌刺の作あることあり、そのかみ
 葉の持説をつらん、その行一書も
 見えしは彼の花の朝の夜と云ふことあり、
 又もと余は従へてあることあり、一又
 柳浪のこの傳をうをみたりき、せんは
 ばししに能へぬ、再展せらるるも

九...のふとし...に...或...の...の...
...の...の...の...の...
...の...の...の...の...
...の...の...の...の...
...の...の...の...の...

浪華雨香園主人

...の...の...の...の...
...の...の...の...の...
...の...の...の...の...
...の...の...の...の...
...の...の...の...の...



...と...と...と...と...
...と...と...と...と...
...と...と...と...と...
...と...と...と...と...

...と...と...と...と...
...と...と...と...と...
...と...と...と...と...
...と...と...と...と...

〜〜と云ふ、あしき處の言に依る
るなり

一長法の子ある朝顔日記の〜なる新
き之れ作者の甚くはたのめくする
けり

昔々長法をいひて種史を論じ自ら
其人ぬ人を寄て詳する事をして此の
連中を以て其の社中へ法の符を以
て夫を種史と稱し、其の意のあら
詳す、一初詳切〜〜〜長法數
程あり、葬（今）信あり、〜〜能はる



品(油)唐のふ説き油即ち油と云ふ短六
首(島)の内の名媛前のふかと云ふ
云々

つるを幕り長法中〜〜〜ことをい
ふ

一翻つる朝顔日記と也松徳三の作と依
る根本をみる、
僕只親し〜〜〜とき、其の源〜
〜と云ふ、漢も〜し〜
ハリし〜〜、まゝに旅日記の大
本

御ふの御方さるる徳三の著とす、只此
二云々

大坂城下の御家大榎村を以て在りつゝの
怪、印名陸助といふる者此屋敷の
道松は二の門より入る山松徳三といふ
浄瑠璃の依りて八部と著す、中
より「おね室監」監「成道仇討」成「花上野
巻の石碑」石「敵打傳」敵「言らば年電山
寺」寺「白心」心「後越前」越の粗て依りて
「司馬徳三」と改め亦其を徳三
とも云、後道松徳三の後より文化也



年の以、朔顔の粗て五帝を依りて
「心眼」の盲女「濱松」濱「あじ島田」島の坊
「おし」お「夜の乾ぬ」乾「のび」の「吹」吹「深吉
自」自「唄」唄「ま」ま「へ」へ「お」お「仕」仕「役」役「の」の「節」節「も
く」く「お」お「の」の「ま」ま「お」お「や」や「ま」ま、「風」風「の」の「津」津「部
回」回「ら」ら「し」し「書」書「る」る「あ」あ「は」は「の」の「ま」ま「あ」あ「は

明治三十七年

八月四日起

才女味閑人

